

## 多分野協働による大学と地域の新しい連携の模索と展開

田上, 哲  
九州大学大学院人間環境学研究院 : 教授

岡, 幸江  
九州大学大学院人間環境学研究院 : 准教授

田北, 雅裕  
九州大学大学院人間環境学研究院 : 講師

<https://doi.org/10.15017/1518129>

---

出版情報 : 大学院教育学研究紀要. 17, pp.23-44, 2015-03-27. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門  
バージョン :  
権利関係 :

# 多分野協働による大学と地域の新しい連携の模索と展開

田上 哲 岡 幸江 田北 雅裕

## はじめに

2010(平成22)年11月に、九州大学教育学部は、糸島市教育委員会と連携協力の覚え書きを交わした。これを契機に糸島市に拠点校(区)を設定し、大学の教育研究と学校・地域の教育力向上・活性化の、両方に資する大学と地域の連携を模索してきた。

本論文は、この大学と地域の新しい連携の模索と展開について、2014(平成26)年度の終わる段階で振り返り、その意義と可能性について考察するものである。

この連携については、後で詳しく論じるように、大学側では主として学校教育と社会教育とまちづくりという専門を異にする3名の大学教員が協働して取り組んでいったものである。本論文では、まず田上が「1 問題状況と大学と地域の連携に関する問題状況と多分野協働の可能性」において、九州大学教育学部と糸島市教育委員会の連携協力の経緯を説明するとともに初期の取組をめぐって多分野協働のための条件について、田北が「2 「みんなの登校日」の課題とその解決に向けた具体的な実践」において具体的な取組に焦点をあてた多分野協働のあり方について、岡が「3 多分野協働の過程における持続的地域理解をめぐって」において「場づくり」の視点から多分野協働に取り組む当事者の認識フレームについて考察する。

## 1 大学と地域の連携に関する問題状況と多分野協働の可能性

### (1) 大学と地域の連携に関する問題状況

本章では、九州大学教育学部と糸島市教育委員会が連携協力の覚え書きを交わすに至る経緯と、2011(平成23)年度に、拠点校(区)である糸島市立波多江小学校(区)への教員や学生のフィールドワークを通じて、学校と地域の共同子育ての場・機会として始まったものの、年月を経て当時形骸化していた「みんなの登校日」を問題として発見し、その立て直しに取り組んだ概要を示す。そして、その取組について、コミュニケーション的転回(高田2011)の観点を援用し、大学と地域の連携に関する大学教員の多分野協働について考察する。

コミュニケーション的転回とは哲学的な思潮であるが、「立場や価値観を異にする二者が、非論理的な枠組みをすべて捨象した状態で意見を交換し、何らかの合意に至るという枠組み」(高田2011:53)の問題であり、次のような問題状況のなかで、専門を異にする研究者が課題を共有し課題解決に協働して主体的に取り組む大学における多分野協働を考察する上で有効な観点となると考える。

さて、大学と地域の連携をめぐる、次のような問題状況がある。

第一に、学校と家庭・地域間、大学と地域間、あるいは大学教員間の様々な連携の重要性が唱えられているが、現実には互いの間でのディスコミュニケーションや相互理解の乏しさのため、なかなか連携が進みにくいことである。これは、本来連携は何かの目的を達成するための手段であるものが、実際には先に連携ありきで、連携すること自体が目的となっていること、つまり目的と手段が転倒してしまっていることに問題があるのではないか。そのような状況の中で、学校と家庭・地域、大学と地域、あるいは大学教員それぞれが、依って立つ立場や有する価値観が大きく異なり、そもそもコミュニケーションや相手を理解しようとする意思が希薄であるのではないか。

第二に、地域への連携や貢献が求められている大学において、実際には担当する個人の専門的関心や利害関係で連携や貢献が進められるか、対照的に組織として義務的に役割を割り当てられ進められていることによることが多いではないかということである。

例えば、上野（2009）が「個人の力に負うことが大きく、ともすればその個人がいなくなると活動が尻すぼみになってしまったり、組織自体が消滅してしまったりもする」と述べているように、大学教員個人が中心となり進められる取り組みの多くは、その個人が異動したり、その個人の関心が他に移ることによって、取り組みが成立しなくなったり、取り組みの質が変化してしまう恐れがある。また、組織中心で進められている取り組みにおいては、担当者によっては、与えられた仕事として義務的に取り組まざるを得ない意識が強くなってしまいうことも多く、当事者意識が希薄になり、取り組み自体が形骸化してしまうこともしばしばあり得る。このような問題状況は、現在地域との連携や地域への貢献が求められる大学においては、多くの大学に共通するものではなからうか。

## **(2) 九州大学教育学部と糸島市教育委員会の連携協力の経緯**

「はじめに」で述べた九州大学教育学部と糸島市教育委員会の連携協力は、形式的には2009（平成21）年度まで実施された旧志摩町教育委員と糸島市教育委員会の連携協力の取り組みを引き継いだものである。旧志摩町を含めた1市2町の合併によって、糸島市が誕生した。九州大学は、糸島市に隣接する福岡市西区元岡の伊都キャンパスへの移転をすすめている。九州大学は、糸島市と連携協力の協定書を締結した。九州大学教育学部と糸島市教育委員会の連携協力の覚え書きは、この大学全体での協定書に基づくものである。

従来までの連携協力は、九州大学のキャンパス移転を見据えて、社会教育を専門とする教員がその発端を形成し、取り組みをコーディネートしてきたものであった。具体的には、公民館の事業支援等の社会教育的な連携や、年1回の教育フォーラム等のイベント的な取り組みが行われた。2008（平成20）年に、社会教育を専門とする教員が他大学に異動した後、学校教育（教育方法学）を専門とする田上がその役割を引き継いで、2011（平成23）年までの3年間連携の窓口担当を担った。

それまで旧志摩町教育委員会では生涯学習課が連携の窓口になってきたが、新しい覚え書きを交わしたことを契機に、糸島市教育委員会では、学校教育課が窓口を担当することになり、九州大学教育学部側では、教育方法学を専門とする筆者とともに社会教育を専門とする岡、まちづくりを専

多分野協働による大学と地域の新しい連携の模索と展開

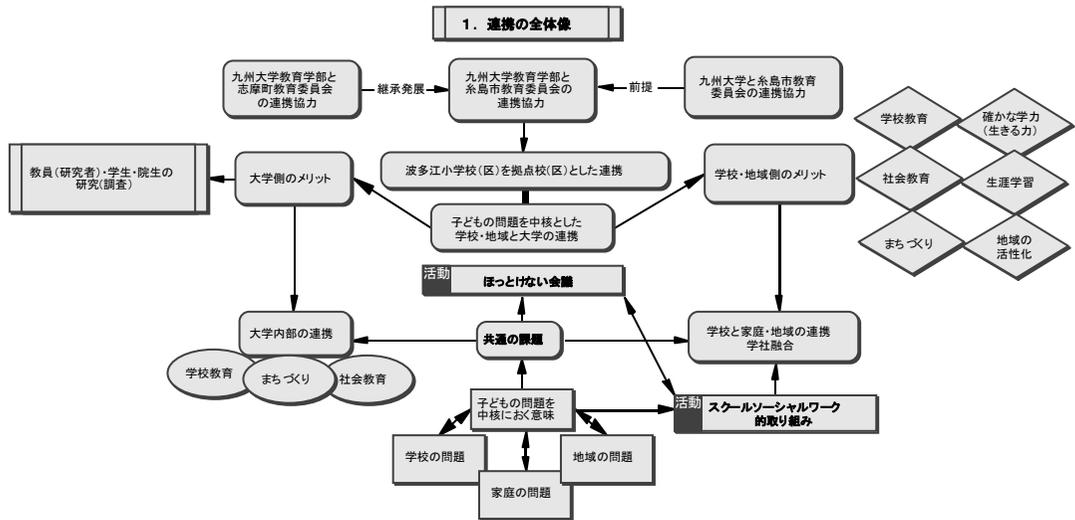


図1. 連携のコンセプト

門とする田北が連携の中核を担うこととなった。このように、九州大学教育学部側と糸島市教育委員会側の当事者が一新したこともあって、九州大学教育学部側では、連携のコンセプトを示す必要があると考え、筆者を含め、3名の教員で協議を重ねた。その際作成したコンセプトは図1に示すようなものであった。

(3) 「プレ・みんなの登校日」のプランニング・実施・評価

本節では、2011（平成23）年度連携協力の最初期の取組である「プレ・みんなの登校日」のプランニング・実施・評価についてその経緯を見直してみる。この「プレ・みんなの登校日」を踏まえて、2012（平成24）年度より本格実施された「みんなの登校日」については次節で田北が詳述する。

2011（平成23）年度前期、九州大学教育学部の学生を対象にした、大学入学直後の1年次の全学教育（教養教育）科目「教育学部コアセミナー」と2年次最初の専門教育科目「教育学文献購読」において、波多江小学校（区）を対象に、田上、岡、田北は学生とともにフィールドワークする機会をもった。具体的には「教育学部コアセミナー」では「まちづくり」を専門とする田北が、「教育学文献購読」では「学校教育（教育方法学）」を専門とする筆者と「社会教育」を専門とする岡が、それぞれの科目のカリキュラムにフィールドワークを組み込み、学校の教職員、PTA 関係者、社会教育施設関係者等への聞き取りを行った。そしてそのフィールドワークを通して、「みんなの登校日」が波多江小学校（区）の一つの問題として浮かび上がった。

この「みんなの登校日」は共同子育ての機会・場となることが期待されて始まったであるが、波多江小学校ではこの取り組みを立ち上げた教員のほとんどが異動し、現在の教員にとってまた子どもや保護者にとってもこの取り組みの目的や意味がよくわからない状態になっており、1～2ヶ月

ごとに実施されるこの取り組みには、保護者をはじめ学校外からの参加者がほとんどいない状況であった。

このような状況を踏まえて、「みんなの登校日」を立て直すことを2011（平成23）年度の中心的な課題に据えた。そして、具体的には、波多江小学校の教職員、PTA、波多江小学校区公民館関係者と上述した大学の教員3名、地域連携担当助教1名、リサーチアシスタントの大学院生2名による、立て直しのための合同の協議を重ね、2012（平成24）年度の本格実施に向けて「プレ・みんなの登校日」のプランニングを行っていった。

そのプランニングの過程については、資料1として協議の議事録を一部抜粋したものを後掲している。その資料からわかるように、かなりの頻度で協議を重ねてきた。計画が実施に向けて具体化していく中で、協議には途中から九州大学の自主サークルや地域団体のメンバー等も参加するようになった。資料2として、当日何がいつどこで行なわれているか実施内容と「みんなの登校日」のコンセプトを掲載した「プレ・みんなの登校日当日のチラシ」（田北によるデザインと制作）を後掲している。

2012（平成24）年1月17日に実施した「プレ・みんなの登校日」には、子どもの保護者だけでなく、地域の方々も含めて多数の参加があった。後掲の「資料3. プレ・みんなの登校日当日の様子」は糸島市教育委員会の連携の窓口を担っていた、学校教育課の伊藤主事がまとめたものであり、2012（平成24）年2月23日に開催された九州大学教育学部と糸島市教育委員会の連絡協議会の際、会議資料として提出されたものである。

「プレ・みんなの登校日」の終了後、参加者と子どもたちには振り返りシートを記入してもらった。後日付箋を用いた反省会を開くとともに、振り返りシートの分析を行った。事後アンケートの結果は、後掲資料4（リサーチアシスタント大島崇（当時九州大学大学院人間環境学府博士後期課程大学院生・現在相愛大学講師）にまとめられているが、例えば、振り返りシートにおける子どもによる活動記録には、固有名を用いてどのような困難があって誰が支えてくれたのかまで記述されているものが多く、子どもどうしにとどまらず、参加した者の中で共有・交流しがいのある内容であったと考えられる。一方で、参加した大人の記述の中には「『みんな』という意味がわからない」「当初のコンセプトまでは届かなかった」といった従来の授業参観とは異なる「みんなの登校日」に対する意見も見られた。

#### （4）小括：多分野協働を支える「共在の場」

以上の取り組みをコミュニケーション的転回の観点から考察すると、「プレ・みんなの登校日」（のプランニングとその実施・評価）が「立場や価値観を異にする二者が、非論理的な枠組みをすべて捨象した状態で意見を交換し、何らかの合意に至る（高田 2011：53）」ための「共在の場」として機能したといえよう。

参加した大人の記述から、すべての関係者に十分に機能したとまではいえないが、少なくともプランニングと実施・評価に関わった当事者においては、「共在の場」として機能していたと考えられる。

また、この取り組みを大学の地域貢献や連携から見た場合、従来の個人的取り組みでも組織的な義務的取り組みでもなく、多分野協働的取り組みとして展開した。それが成立した要因として、まずこれに取り組んだ3名の大学教員がこれまでの地域連携のあり方に疑問をもっていたということがあげられる。加えて、より大きな要因として、従来「教育学」とあまり接点のなかった「まちづくり」という視点が導入されたことである。それによって「学校教育」と「社会教育」がそれぞれの枠内で完結することなく、「まちづくり」を専門とする教員も含めて当事者である3名が各自の専門性を生かし、それぞれが自身の視野の広がりを感じつつ取り組みが進んだ。

このことは、大学の多分野協働を考える上で重要な示唆を与える。従来から行われてきた、個人的な取り組みによって成立する地域連携と、組織的な取り組みによって成立する地域連携とは異なり、個人的な取り組みと組織的な取り組みの間にあるものが実は重要ではないかということである。

この中間にあるものは、組織論的な枠組み（すなわち経営学的な追究）や個人的な動機づけの観点（心理学的な追究）だけでは、十分な分析が難しい。今回の取り組みでは、ある種の同志的なつながりが成立した。それは、連携し協働する相手（学校や地域の当事者とともに協働している他領域の研究者）の、隠れているものを含めてニーズに関心をよせることと、自己の課題（学校や地域の当事者にとっては解決すべき現実の課題、大学研究者によっては自身の研究課題）を視野に入れることの両方がバランスよく成立したということである。

## 2 「みんなの登校日」の課題とその解決に向けた具体的な実践

### (1) 学校の課題把握から「みんなの登校日」の改善プロジェクトへ

先に田上が示したように、本プロジェクトは、2011（平成23）年度前期の講義から具体的に動き出した。各教員がそれぞれの視点からテーマを設定し、学生とともに現場に入り、フィールドワークに基づく課題整理を行った。最終的に、その課題の中でも学校のニーズが特に高かった「みんなの登校日」の改善について進めて行くことに決まった。本章では、その具体的な実践を詳述し、その中から多分野協働の手がかりを見出した。

「みんなの登校日」とは、2008（平成20）年から波多江小学校が取り組んできた実践で、1～2ヶ月に1度、学校を開放し、保護者はもちろん、地域住民であれば誰でも登校してよい日のことである。「地域の人たちと共に子供たちを育てていきたい」「ゆくゆくは、地域の人たちと共に学校を運営していきたい」、そういった学校の思いから始まった企画である。「みんなの登校日」では、通常の授業参観と異なり、保護者が我が子以外の子どもたちとの関わりを見出したり、地域住民が参加できる授業の実践が目指されてきた。しかし、田上が指摘したように、現実はいまうまく機能していなかった。初年度こそ保護者の参加が見られたものの、それ以降は、全校生徒約700名の当校において、数名程しか参加がなかった。

## (2) 「みんなの登校日」の課題

以上の現状を踏まえ、筆者らはフィールドワークを重ね、課題を抽出・整理をした。その結果、①日程、②学校内外の情報共有、③教職員の負担、④情報発信・ネットワークづくり、⑤授業や場のつくり方、⑥運営体制、の大きく6つの視点にまとめることができた。

例えば日程については、学校側が教職員の負担を鑑み、午前中に「みんなの登校日」を開催した後、午後から授業参観を開催していた。保護者は、午後から我が子の姿が見られるため、午前中から参加する動機が乏しい状況にあった。また、「みんなの登校日」の主旨や目的が共有されていないため、普段から多忙な教職員は意義が見出せず、その結果、一部の教職員にさらに負担が生じる構造にあり、保護者へも正確な情報が伝わらない状況にあった。さらに、「みんなの登校日」の主旨に則り参加した保護者も、現場で自身の役割を見出しにくく、手持ち無沙汰になり、せっかく参加したにも関わらず、次回以降、足が遠のくという現象も見られた。

このように「みんなの登校日」は子どもにとっての多様な学びの場となるだけでなく、地域による学校運営や、地域コミュニティを育むきっかけとして多元的に機能していく可能性を有しているながら、活かせていない状況にあった。

## (3) 課題解決のための提案

以上の課題を受けて、大学側から新しい「みんなの登校日」のコンセプトを「『みんなの登校日』とその企画運営のプロセスを通じて、子ども、教師、保護者、その他の地域の人たちが協力し、それぞれが抱える課題や困難を解決していくこと」そして「大学の研究や教育としての関わり方を活かしながら、学校・家庭・地域のそれぞれだけじゃできないことを、『学校』という場を拠点に、みんなで実現していくこと」と設定し、以下のような提案を行った。

### ①日程の改善と「みんなの授業」の質の向上

従来まで授業参観日にあわせて1～2ヶ月に1回開催していた「みんなの登校日」を、年に2回開催とし、その日は終日「みんなの登校日」とすること、さらに、共働きの保護者に配慮し、年度初めには日程を決め、周知することとした。開催数を少なくすることにより、各回の授業（「みんなの授業」と命名した）の質を高め、保護者をはじめとしたより多くの主体が企画に参加できるようにするとともに、教職員の負担軽減の実現を目指した。

### ②学校内外の情報共有を見越した運営体制の改善

「みんなの登校日」を企画運営していくために、実行委員会を設立することとした。基本的にそのメンバーは、小学校の教職員（校長・教頭・各学年の担任など）、教育委員会、PTA 代表者、地域住民の代表者（当該区長など）、公民館職員、大学教員、リサーチアシスタントの大学院生とし、内容により柔軟にメンバーを追加・変更できることとした。そして、当事者全員で授業や場をつくっていくムードを大切にしながら検討を重ねていくことを目指した。以上の実行委員会のマネジメン

トは、ゆくゆくは、小学校主導で進めることが望ましいが、初期は大学が主導しながら進めることとした。

### ③情報発信・ネットワークづくりの改善

新聞、学校が発行する通信、ホームページ、メール、チラシ等を活用した情報発信のノウハウと、保護者や地域住民等とのネットワークづくりについて、大学側から知見を提供することとした。そして、持続可能なシステムとなるよう、最終的にマニュアル作りを目指すこととした。また、各種メディアを用いた情報発信だけでなく、「みんなの登校日」当日には「インフォメーションコーナー」で参加者に対しての案内を行い、参加者が自由に利用できる「みんなのサロン」と銘打った交流スペースを設け、授業以外での出会いや交流を促すとともに、参加者の居場所づくりを目指した。

#### (4)「ブレ・みんなの登校日」の開催。そして「第1回 みんなの登校日」へ

以上の提案を踏まえ、2012（平成24）年1月に「ブレ・みんなの登校日」を、そして同年7月には「第1回 みんなの登校日」を開催するに至った。

「ブレ・みんなの登校日」においては、田上が先述したように、2012（平成24）年10月から計6回の実行委員会を開催し、主旨を共有した上で当事者全員で企画を練っていった。結果的に「ブレ・みんなの登校日」では、伝統食の理解と「みんなのサロン」を目的とした郷土料理を振る舞う企画や、学生団体および公民館と連携した各種授業、そして保護者を対象とした「みんなの登校日説明会」等を開催することができた。子どもたちと地域住民との直接的な交流が少なかったものの、概ね、当初の提案に沿った内容となり、新しい「みんなの登校日」に向けた大きな足がかりとなった。

「ブレ・みんなの登校日」の後、引き続き実行委員会による会議を開催し、同年7月の「第1回 みんなの登校日」に向けて企画づくりに取り組んだ。その検討過程においては、4人の教員が、大学の演習「教育学フィールドワーク」の中で30人余りの学生とともに学校や校区のフィールドワーク調査を行い、また、課題解決のための提案を行った。当日のスタッフとしても学生が20名程関わり、学校関係者やPTAと協力しながら無事に終えることができた。

ブレに続き、「第1回 みんなの登校日」においても大小様々な新しい動きは始まったが、その中でも特に大きなポイントは、地域住民等との新たなネットワークづくりを目指した「おもいで授業」、そして波多江小学校の従前の課題であった「地域と連携した防災教育」の2つの新たな取り組みを始めたことである。

「おもいで授業」とは、波多江小学校を退職した先生が、当時の教え子たちに教える授業である。「学校や先生への思い出や愛着」を基にしたアクティビティを創出するとともに、そのネットワークが学校の運営等に活用できるように「見える化」していくことが目的のひとつである。

#### (5)「おもいで授業」の可能性

「おもいで授業」は様々な可能性があるが、ここでは主として学校や地域における課題解決という

文脈における可能性について触れておきたい。まず、不特定多数の人たちに向けてではなく、「思い出」をキーワードに「学校に愛着を抱いている人たち＝学校の運営や課題解決に対して当事者感覚で関わる素養・可能性を持ち合わせた人たち」を顕在化し、学校の情報をしっかりと届け、ネットワークしていくことの意義である。

現在の小中学校は、コミュニティ・スクールやスクール・ソーシャルワークのニーズに現れているように、家庭と地域の状況が複雑に絡んだ「学校だけでは解決できない課題」に溢れており、保護者や地域住民とともに、学校運営にかかる課題や子どもたちが抱える困難を解決していくことが望まれている。その中で、不特定多数の地域住民に向けて協力を依頼しても、なかなか当事者感覚を持ち、関わる人は出てこない。そこで、地域内外の同窓生や退職した先生といった「学校に愛着を抱いている人たち」に着目し、関わりをつくり出す試みとして位置付けた。さらに、このアプローチは学校だけでなく地域にとっても有用である。全国的に進行する人口減少・少子高齢化は、近い将来、学校運営だけでなく、あらゆる局面で、まちづくりを担う人材の不足を促していく。その中で、地域住民が強い愛着を抱く場として機能している公立の小中学校は、今後、地域を離れてしまった人たちに再び帰ってきてもらったり、離れたままで主体的にまちづくりに関わってもらったりするための拠点として活かしていける。つまり、「おもいで授業」とは、学校運営や子どもたちの課題解決に協力してくれる人材をネットワークすると同時に、地域のまちづくりに携わる人材が集う仕組みとしても位置付けられる。

また、今回の「おもいで授業」は、退職された先生が当時の教え子たちに教える内容となったが、「思い出」をキーワードにした子どもたちの新たな学びの場としての可能性も大いにある。参加者の情報をストックし、ネットワークを維持していくことで、例えば、米作りが得意な人とか、会社の経営者とか、そういった同窓生とのネットワークが構築されていけば、後々、通常授業のゲストティーチャーとして関わってもらえる等の教育面における意義もある。

#### (6) 小括：「みんなの登校日」にみる多分野協働

本事業の特色は、学校教育（田上）、社会教育（岡）、そしてまちづくり（田北）を専門とする複数の教員が協働しながら進めている点にあった。大学と地域との連携事例においては、単独の教員がアドバイザー的役割で短期的に関与するものがほとんどである中、本事業は、複数の異分野の研究者が継続的に協働する、希有な事例であった。

そんな中、プロジェクトの素材として見出された「みんなの登校日」は、多分野協働の象徴として位置付けられるものだったと言えよう。当初見出した6つの課題は、ひとりの専門性で解決できるものではない。実際に、その提案に辿り着くプロセスにおいては、3人の教員が会議に参加し、各々の視点から意見を述べ、改善を促していった。

学校教育の視点から、「プレ・みんなの登校日」から実践した「みんなの授業」の質の向上が目指された。そして第1回において開催した「おもいで授業」のコーディネーターやその教育的意義の評価等がなされた。また、先述したように「おもいで授業」はまちづくりにおいても意義のある取り

組みであった。その意義を位置付けることで、ひとつの営みから多元的な価値を引き出すことが可能であった。

一方で、「みんなの登校日」として成立する必要条件と言える地域との交流の幹として位置付けられたのは「ブレ・みんなの登校日」で実践した郷土料理のふるまいと「みんなのサロン」であった。それらを媒介とした多主体との交流は、学校と保護者、地域住民との接点となり、社会教育の視座が有効に機能した例といえる。

また、「みんなの登校日」において多様な関わりを見せたのは、大学教員だけではなく。それぞれの教員の研究室に所属する学生、講義の受講生や学生団体も個別企画で関わった。そして会議には、学校の教職員（校長・教頭・各学年の担任など）、教育委員会、PTA、地域住民の代表者（当該区長など）、公民館職員が参加している。これらの多様な主体の関わり全体の全体像を俯瞰しながらプロジェクトを牽引していくことも、大学側に課せられた役割のひとつであり、そのマネジメントは、多主体が関わる「まちづくり」と親和性の高いものだったと言えよう。筆者の感覚としては、日頃のまちづくりの実践が、そのまま学校という現場に移行したように捉えられた。「みんなの登校日」は、確かに学校の課題を整理する中で見出されたひとつの営みであった。しかしそれ自体に象徴的に含意された多主体の存在と形式が、各々の専門性を束ねる契機として機能したと言えるだろう。

### 3 多分野協働の過程における持続的地域理解をめぐる

#### (1) ひとつの対象に多分野協働で関わり続けるということ

本項では、協働プロジェクトの参加者の一員である岡が、その専門領域や固有の問題意識のもとに、とりくみの過程に並行してその視角をどう変容させてきたのかに焦点化して、論じてみたい。

ここまで、田上（1節）・田北（2節）によって、この4年間にわたる波多江小学校プロジェクトの全体像（1節）、およびその中心的事業としての「みんなの登校日」のプロセス（2節）について論じられてきた。では、こうした本プロジェクトの構成は、おのおのの専門性に何らかのインパクトを与えるものだったのだろうか。

三者とも、専門性は違えながらも、なんらかの実践現場に関与しながら研究をすすめてきたことにおいては共通している。しかも、対象によってさまざまではあるが、なかには年月をかけてひとつの自治体や地域や現場に継続的にかかわる経験も、各々当然ありえることであった。一方で、複数名の専門分野を越える研究者が共にひとつの実践に関与することもまた、よくありうることである。しかし、そうした協働の多くは資金的バックグラウンドをもった時限つきプロジェクトであることが多い。

つまり、進退についての折々の判断は当然ありうることもとしても、ゴールをあらかじめ設定しない継続性をもった事業において、異分野の研究チームがひとつの対象に関与し続けるというケースは、あるとしてもそう多くはない。

なぜなら、それには協働やその持続性を担保する、いくつかの条件を必要とするからだ。我々の

ケースの場合、田上が指摘するように、すでに経験してきた大学の地域貢献や協働事業への疑問から、そうした既存のかたちをこえる新たなモデルをつくろう（もちろんその協働への参加主体は研究者のみならず、現場の実践家・市民たちも想定している）とする目的意識を一つにしていたことがその条件の根底にあった。さらに、専門特化しやすい既存の研究分野に加えて、田北の「まちづくり」という軸が加わったことは、われわれの多分野協働の質を大きく左右している。これは後述するように、視角が大きく異なる視点がまじりあうことが重要という単純な話ではない。その意味については今後さらなる議論を要するところだが、現段階において筆者は、問題解決志向の強い「まちづくり」と分析的志向の強い既存の研究の認識フレームとが出会い、それでもその関係を持続していこうとするとき、その認識フレームの問い直しとゆるやかなずらしが継続的に促されていくことが重要だったのではないかと考えている。

だとすれば、多分野協働による、そのフレームの問い直しとずらしとは、どのようなものであったのか。それを具体的経緯に照らして考えることは、「フィールドにねざした学際的協働とは何か」を考えるうえで、決して無意味ではないだろう。そこで以下、筆者における「地域理解」の変容に即して、論述してみよう。

## (2) 「場づくり」の視点からみた地域

社会教育学を専門とする筆者が2011（平成23）年の多分野協働開始の時点からフィールドに即して今日まで一貫して関心を抱いてきたのは、「場づくり」の視点からみた〈地域と教育〉の新たな関係性、公共的な拠点（学校・公民館や社会教育施設・地域関連諸施設）の変容可能性である。

元来社会教育学は、教育の組織化をなんらかの方法で対象化しようとするものであるが、社会教育法に基づき小地域配置の公民館を中心とした「施設主義」を貫いてきた戦後社会教育にとって重要な研究対象のひとつは、暮らしや学習のニーズに即して、社会教育に関する施設や事業がいかなる組織化のプロセスをたどるのかという点であろう。しかし実際には、諸実践をつらぬく「地域像」あるいは「施設像」自体が硬直的に固定化し、職員や市民にとって、自らをとりまく環境としての施設や地域は、参加し変えうるものではなく、自分たちのありようを規定する前提条件とうけとめがちである。

U・ベックは、場所・空間の概念が大きく変容するグローバル化の生成過程においては、生活・労働様式も、組織も、制度も、変化のただなかにおかれ、人々は「個人化」の過程をたどると指摘する。さらにアサダワタル（2014）が指摘するように、ある価値の集合体としてのコミュニティ（それはいわゆる地域にとどまらずある専門性や業種などもふくめて）の縛り・強制性が進行し、より小さな集団に閉ざされている。それは他の「あたりまえ」を見えなくさせ、おのおの固有の「あたりまえ」が生み出されてしまう。

おのおのが「あたりまえ」に閉ざされがちであるのは、学校も、社会教育施設も、地域集団も同じである。その「あたりまえ」をこえていく社会的しかけを生み出すことができるのか。ここでいう「場づくり」とは、そうして「社会的しかけ」を創造しようとする営みをさしており、社会教育

学にとってはそこに地域に根ざした知や、地域の問題解決への行動計画を見出していくための基盤づくりのありようへの問いがこめられている。

### (3) 持続的地域理解 —チャレンジと挫折の連続でしか見えないもの

しかしこうした「場づくり」志向をもって折々にのぞんできた多分野協働であるが、実際には挫折の連続というにふさわしい試行錯誤をたどってきた。しかし現時点でふりかえると、そうして継続的な試行錯誤をたどらなければ行わなかった探究や見えなかったものがある、といえるかもしれない。前述の田上は主に初回の「プレ・みんなの登校日」たちあげプロセスについて、田北はプレおよびそこから「第1回みんなの登校日」へのプロセスについて、という枠で論述しているが、本項は「プレ・みんなの登校日」の具体化から多分野協働4年目にいたるプロセスを対象とし、「みんなの登校日」における「場づくり」の視点から論じることとする。

#### ①「プレ・みんなの登校日」のたちあげと「サロン」づくり

「プレ・みんなの登校日」の試みがはじまった当初、協働プロジェクトに参加した3名の大学教員が共有していたコンセプトは、「ほっとけない会議」と仮称する、子どもの問題を中核とした学校・地域と大学の連携にむけた具体的な推進基盤づくりであった。その方策のひとつとして考えられ、岡が担当をつとめたのが、来校する父母、そして地域の人がたちより、まじりあい、情報をお互いあうことのできる「サロン」の試行である。ここには既存の学校・家庭・地域の連携が本当に「子ども中心」になりえているのかという田上のモチーフ、問題解決にむけた適切な情報共有・交流の媒体をとという田北のモチーフ、そして前述の岡の「場づくり」のモチーフがそれぞれ重ねあわされていたとも思う。

「プレ・みんなの登校日」において初めてサロン設置を試みるにあたり、当校で例のない試みであったこともあり、来校した父母がいかにか足をとめてくれるかを最大の課題に設定していた。そこで考えられた目玉は、食推協・公民館協力による郷土食「糸島そうめんちり」のふるまいである。さらに本番直前の九大発案、クラス担任全面協力によって子どもたち直筆の絵日記ラミネートが準備された。空間的にも、とりくみを説明する部屋と飲食の部屋を分離し、後者についてはテーブルの装飾やカフェ風の装飾が意識された。

はたして「サロン」準備段階においては、サロンづくりを担当した社会教育の院生と田北のサロンイメージのずれが焦点化された。院生は来訪者が安心して関係づくりへふみだせる空間づくりをより意識し、田北は空間性より情報提供・情報交流の場としてのサロンをより意識していた。様々な意図を重ねあわせやすい「サロン」だからこそ、その位置づけは慎重に検討せざるをえないことが、試行してわかったことであった。

ふたをあけてみれば、呆然とするほどに、人が来なかった。地域から民生委員さん等が若干名、保護者も若干名というありさまであった。一方、子どもの入室は認めていなかったため、窓の外からは子どもたちがうらやましように「ちり」の提供を見つめていた。

## ②「第1回みんなの登校日」にむかうプロセスと保護者調査

ブレの経験をふまえ、2012（平成24）年7月の「第1回みんなの登校日」にむけて、岡は「サロンの改善」を大きなテーマにかかげた。そのため、2、3年生による学部授業「フィールドワーク演習」の岡担当グループは、「保護者」に焦点をあて、これまでPTAが学校でどのような活動にとりくんできたのか、また保護者の意識や生活・地域活動の実態にPTAインタビューやアンケート調査（いかに保護者と接点をもつかその方法そのものが課題であり、結果子どもサークルに送りにくる保護者層に協力をいただいた）を通して迫ろうとした。

両調査を通して、様々なことが浮上した。たとえば「ブレ」のある種の失敗の原因は、広報不足だと思われていた。しかし実際に聞こえてきた声は、「知っていたけど、しきいが高くて行きにくかった」というものだった。「ブレ」におけるサロンの存在を、親たちは知っていたのである。つまり情報は届いていたが、親たちの意識や行動と、サロン設置のありかたに、そもそも何らかのずれがあったということである。

では親たちが語る、彼らの動きの実態とその背景はどうだったのか。サロンは主に授業時間とその前後にかけて設定されていた。彼らはわが子の参観授業に時間を繰り合わせてかけつけ、授業が終わると特に低学年の子の親は真っ先に帰った。帰宅時間の早い低学年の親はなおさらのこと、サロンにゆっくりしている時間などなかった。

一方で、私たちは新たに「サロン」を立ち上げようとしていたが、波多江小学校にはPTAとそのOBを中心とした「サポーターズクラブ」が手づくり活動・英語の学習支援など、めざましい活動を繰り広げてきていたと知った。別棟にあるPTAの拠点は、クラブのメンバーたちも比較的自由に出入りし、これは私たちの思う「サロン」の基盤そのものではないのか、という発見があった。ただし彼らの活動実態は、一般の親や地域の人、まして一部管理職をのぞく教員たちにもよく認知されていなかった。認知されぬまま陰で「学校お助け隊」的活躍をしていた。その認知の薄さもあってか、学校はPTAの全面協力がある種あたりまえと思っている所があり、活動する親たちと学校との間のある意識のギャップが我々に強く印象づけられた。

新生サロン当日。場所はサポーターズクラブやPTAの蓄積、そしてサロンのこれからも意識して、PTAルームに設定された。サロンづくりにおけるPTAとのコラボは調査過程をご一緒したこともあり、理想的にすすんだ。学生たちと考えたコンセプトは「サポーターズのエンパワーメント」であり、活動紹介のパネルを設置した。また親たちに立ち寄ってもらおうと、親たちが普段みることのできない子どもたちの日常を記録し掲示することを試み、同時にサロンには、「おもいで授業」に連動して、学校の歩みにかかわる写真展示スペースを設けることとなった。この写真スペースは多くの人の目にとまり、また滞在する動機をつくりだすものとして大きな役割を果たした。親に同行した幼児に絵本を読むスペースも好評だったが、おもいで写真の展示が、それ以上に来校者たちが足をとめる効果をもたらしたことは、九大メンバーにとって発見であった。

ただし、学校・教師たちとのコラボという点では、サロンをめぐる意識のずれが目立ってきた。岡や授業グループはサロンはオルタナティブな空間でありひらかれた情報交流の場として位置付け

る方向性で調査や活動をすすめてきたが、学校にとっては授業活動を補助するものとしてのサロンという位置付けが一層濃厚になったのがこの「第1回みんなの登校日」でもあった。

### ③みんなの登校日の「授業」への焦点化と、「もうひとつの場」を求めて

「みんなの登校日」は、その後学校側の主導性により、防災・キャリア教育を中心とした授業を中心とした展開にむかった。大学側としても近い将来には地域（学校と地域）の自律運営に向かうことを目標としていたため、より学校主導の動きになっていくことは望ましいことであった。ただし本来はボランティアな地域のサポーターを中心とした「学校と地域」による運営スタイルを模索していただけに、「学校」による運営にとどまったことは残念なことであり、社会教育の側からここにかかわりつづける理由を見失っていったことにもつながった。

また「みんなの登校日」には、プレから第1回に至るまで、隣接する公立校区公民館の主事に関わり続けていただいていた。波多江がモデル「校」ではなく、モデル「校区」であることが前提であり、学校と公民館の連携はその重要な核になると考えていたためだった。しかし公民館の明確な役割を示すにはいたらず、その後「みんなの登校日」から公民館の存在は消えていった。

「フィールドワーク演習」岡グループは、2013年度は視野を糸島市全体に広げ、「場としての図書館」の視点に基づく市内関連施設も含めたネットワーク化にむけての探究を行った。市の図書館サービス計画の議論がタイムリーにすすんでおり、地域性を反映してこの間学習を重ねてきた移住層も含む多様な市民が参加するなかに岡も参加しており、その議論に学生たちも調査と提案を通して参加することを意図していた。また移動図書館廃止の議論が浮上する中（その後廃止決定）、拠点レベルのサービスネットワークのありようが検討課題にのぼっていた。2014年度にはその全体像も意識しながら、再度波多江校区公民館を地域のネットワーク拠点と位置付ける可能性をめぐり、波多江校区内の様々な場のありようを探索した。

## (4) 小括：多分野協働という相対化の方法

### ①分析志向と問題解決志向が交わりつづけることから

今回の多分野協働に参加した田上、田北、岡は、専門領域が違うというばかりでなく、基本的な認識枠組みにおいて、教育学の文脈に基づく分析的な認識をとる田上・岡と、ランドスケープ研究を出自としフリーランスで依頼をうけながらまちづくりにかかわってきた田北の問題解決を前提とした認識という違いがある。

それはどういう影響をもたらすのか。岡は、ときにもともともっていた目標像を担保してでも、対象との関係の持続を優先しながら認識のありようをずらしていく（ようにみえる）田北の目線や行動に、驚くことがあった。たとえば「みんなの登校日」の自立運営の方向は、われわれがめざしていた方向とは結果的に異なるものとなった。それでも学校研究に立ち位置を置く田上はもちろん、田北もまた教師たちの発する声にまず応じるスタンスのもとに、学校と向き合い続けた。おそらくは学校を含む地域の潜在的ニーズと可能性という長期的展望に判断の基盤をおくのか、当面の学校

のニーズに判断の基盤をおくのかの違いかもしれない。そこには大学と地域連携の際、大学側がつい理想をおしつけがちになること、いかに細やかなすりあわせや細やかな段階の想定が必要かということをおぼされた。同時にそれは、いったん自らが出した認識との距離感の違いともおもわれた。教員三者で語る場面において、分析的志向が自らの認識によりとられる傾向をもち、認識しようとする対象をとときに限定的にとらえかねないことにしばしば気づかされた。

## ②ある対象とのあいまいな関係・試行錯誤を持続する可能性

前述のように岡の場合、2013年度からフィールドワークの対象を学校から一旦はずした。しかし田上・田北グループが学校との関与を続けていたことによって、情報共有の場や学生たちの調査研究報告の場などを介し、常に学校の動きが視野に入ってもいた。もしもこれが他の一般的な関与のように研究者や研究室単独の現場との連携であれば、学校を調査・活動対象からはずすことは、連携自体の終了を意味したかもしれない。しかし協働体制による連携であればこそ、あいまいな距離感や自由な試行錯誤が可能となった。

そうしたスタンスによってこそ見えること、学校から離れた自分たちの探究が学校を新たな視点でとらえなおす可能性もある。例えば2014年度、波多江校区内のさまざまな新たな場の動きを複数チームにわかれて探究した際、ある学生たちは障害支援を行いながらコミュニティカフェも運営するNPOに焦点をあてた。その団体が地域内のどういう組織や機関・人とつながっているかを示すネットワークマップを作成してみると、公民館とはほぼ線がきれっているのに対して、学校とは他の機関と比べても、かなり密接な関係を築いていることが浮き彫りになった。

ちょうどフィールドワーク演習の他のチームは、学校側の依頼もあり、特別支援の「ひまわり学級」に密着していた。そうした動きとも照らし合わせると、こうしたNPOとの関係への派生もふくめ、特別支援の学級の存在を通して、学校のなかで「障害をもつ」ということが思った以上にふつうに根付き、地域とのあらたなネットワークの可能性も開いていることが想像された。これは、学校とのあいまいな関係を持続する教育・研究環境が保障されていたからこそ、みえてきたことだといえるのではないかと考えている。

## おわりに

学校現場では、教師をめぐる協働や連携、同僚性といった用語が頻繁に使われる。子どもたちにも、協力や仲良し、協調性といったことが求められる。しかし、このような用語は抽象的なものである。スローガンにはなり得ても、目的に据えることは本来できない。協働にしても、協力にしても、それはともに何かに取り組むことにおいて生じるものである。何も媒介がないところには生じない。我々の出発点もここにあったと考える。

そして今回、多分野協働の取り組みについて振り返ってみると、目的というものは原理的に達成できないものだということが実感としてわかる。人間が何かに具体的に取り組んでいくということ

は、当初の目的そのものが少しずつずれて変化していくことであり、同時に取り組む我々自身が少しずつ変化していくことである。したがって、決して到達できない目的に向かって、決して到達できないということがわかっていながらそれでも取り組んでいくということがどのように成立するのかということが問われなければならない。この取り組みが今後も続いていくとすれば、そのなかで改めて考えていきたい課題である。

拠って立つ立場を互いに異にする我々3人はこの取り組みの中で、岡が端的に示しているように、それぞれが困難に直面し対峙してきた。互いに苦しい心情を吐露することもあったが、大学人として研究者としてまた連携に取り組むそれを推進する当事者として、自己のアイデンティティを見つめ直し問い直す極めて個人的で孤独な省察の機会を得たと考えている。

この極めて個人的で孤独な省察は、現在の協働や協力、効率性を重視する考え方に立てば、適切でない無駄な作業と位置づけられるかもしれない。しかし、形や形式ではなく、ものごとの本質を追究すること、そして一人ひとりが生きることができるよう、世界を現在より少しでもよりよいものにしたいと真剣に考えることに真摯に向き合う人間にとって非常に重要な作業であるのではなからうか。上述の課題と関連する課題として、この点も今後考えていきたい。

## 引用／参考文献

高田明典（2011）現代思想のコミュニケーション的転回 筑摩書房

上野 武（2009）大学発地域再生 清水弘文堂書房

佐藤晴雄（2002）学校を変える 地域が変わる 相互参画による学校・家庭・地域連携の進め方 教育出版

小林英嗣＋地域・大学連携まちづくり研究会編著（2008）地域と大学の共創まちづくり 学芸出版社

濱田康行編著（2007）地域再生と大学 中央公論社

宮田由紀夫（2009）アメリカにおける大学の地域貢献 産学連携の事例研究 中央経済社

OECD 編 相原総一郎・出相泰裕・山田礼子訳（2007）地域社会に貢献する大学 玉川大学出版部

伊藤真知子・大歳恒彦・小松隆二編著（2007）大学地域論のフロンティア—大学まちづくりの展開 論創社

Ulrich Beck（1998）危険社会（東廉、伊藤美登里訳）法政大学出版局（原著1986年）

アサダワタル（2014）コミュニティ難民のススメ 木楽舎

## 資料 1. 議事録の抜粋

2011年10月4日

○1月17日のみんなの登校日に向けて

- みんなの登校日の企画会議は、10月2回、11月2回、12月2回、1月1回ほど行いたい。波多江小学校からは各学年から1名ほど。
- 年間計画では、1月17日はみんなの登校日と全体授業参観となっているが、全体授業参観の時間もみんなの登校日としてもよいのではないか。
- 学校ばかりが主導になるのではなく、地域が学校を一つのベースにしていく。
- 現時点では、学社連携での生涯教育課との協働は難しい。「公民館にも学校にも来る日」というスタンスで、生涯教育課や公民館も巻き込めないか（これは来年度以降か）。

2011年11月9日

○スケジュールの共有

- 1月17日の「みんなの登校日」は、「プレ」として位置づける。
- プレ「みんなの登校日」の内容は、広報のことを考えて、次回（11月16日）までに決定する。

### 【決定事項】

○1月17日のプレ「みんなの登校日」について

- 給食時間は、給食参観など保護者が参加できる時間にする。
- 「昼休み」と「そうじ」の1時間で、「みんなの登校日」の説明会を行う。
- 5時間目を授業参観にする。

### 【課題】

○1月17日のプレ「みんなの登校日」について

- 給食の時間は、弁当交換会にするか、他の参観の形式にするか？
- 授業参観を保護者が参加できる形式にすると、特別教室等が足りないなどの場所の問題がある→具体的なアイデアが出てきたらすり合わせていく。
- 保護者が気軽に立ち寄れるサロンなどについても要検討。

2011年11月16日

○誰に対してどのように知らせるか？

○1月17日の給食時間はどうするか。

○1月17日の授業参観について

### 【決定事項】

○1月17日の給食時間について

- 「糸島そうめんちりの会」を開催する。／•「旬の会」などの地域の団体に声をかける。

○広報誌について

- 締切は12月1日（12月20日に発行）／• 次回の企画会議までに、1月17日の「プレみんなの登校日」のネーミングや授業の内容などを決定し、広報誌に反映させる。

【課題】

- 1月17日の5時間目の授業内容。
- 「プレみんなの登校日」のネーミング。
- 「糸島そうめんちりの会」を具体的にどのように進めるか。

2011年12月1日

○5時間目の授業について

- 1年生は「生活科」昔の遊び。六十爺会／• 2年生は「生活科」冬の遊び。／• 3年生は「図工」。卒業生を送るための体育館までの飾り。／• 4年生は、2分の1成人式。写真立て作り。／• 5年生は、図工。絵手紙が有力。／• 6年生は、愛校活動を検討しているが未決定。
- 45分だけで何かを成し遂げようと考えると限界がある。「親子写真」のように、「みんなの登校日」を事前・事後とのつながりで設定すると、いろいろな可能性が出てくる。
- iTOP（注 九州大学学生によるボランティアグループ）の飛行機教室は、対象50人で、2時間分の時間があれば可能。
  - スタッフの人手が足りない場合は、事前に保護者相手に講習会もできるだろう。
  - 6年生の選択肢のアイデア。6年生は九大の連携で。

○「糸島そうめんちり」について

【決定事項】

○1月17日の流れ

- 12：15～13：00 「食べてみんなしゃい、郷土料理糸島ちり」（限定100食、無料）  
（於：家庭科室，図工室（2F））
- 13：00～14：00 「みんなの登校日ってなあに？」（於：体育館）
- 14：05～15：35 「みんなの授業」（1年生のみ14：05～15：05）

【課題】

- 1月17日の内容の確定。
- 授業内容の未確定部分の確認。／• 「糸島ちり」の材料と予算の確認。
- サロン，インフォメーションコーナーについての検討。

2011年12月13日

○授業内容について

- 1年生 17日は保護者と子どもで、あやとりとお手玉。  
六十爺会とは、1月下旬に竹馬や竹とんぼの活動を行う。
  - 2年生 カルタ，福笑い，双六，羽子板から子どもが作りたいものを一つ選び製作。  
学生に手伝ってもらえないか？アイマスクも必要。
- 九大生のサポートについては、5年生の紙飛行機でも学生スタッフを必要としている。サロンにも学生が必要。スタッフが回らないかも。
- アイマスクは、4年生が使用したものがある。
- 3年生 変更点，問題点なし。
  - 4年生 変更点，問題点なし。

- 5年生 現時点での希望は、紙飛行機64人、落語6名、絵手紙42人。  
紙飛行機が定員50名なので、絵手紙は2グループに分けて。  
落語の内容は、落語についての紹介を聞いて、子どもが落語をやってみるというもの。  
→絵手紙のスタッフが最低2名は来てほしい。佐藤主事に確認してもらおう。  
→紙飛行機のスタッフはiTOP以外ではあと5名必要。  
→予算が1機に200円、のりも必要。要見積。  
→保護者にスタッフとして手伝ってもらえると助かる。
  - 6年生 「卒業運動、僕たちの学校」晴…遊具のペンキ塗り、雨…壁の剥げた箇所に絵を描く（2F、4F）。予算は事務から。塗り方のレクチャーをできる方がいないか？  
→場所を決めなきゃいけない。どこが剥げているのかの情報収集が必要。  
→下絵のチェックが必要。ただの落書きにならないように。  
→ペンキの色の選択も注意。例えば水色にもいろんな色がある。変な色にならないように。
- 「糸島ちり」について
- 教育委員会農業振興課の準備で、レシピ、紙芝居、のぼりが届いた。
  - 旬の会の見積り、材料、お椀、箸を合わせて27740円。  
笠さんという方が窓口。当日は小笠原区長、佐藤主事も参加。
- サロン、インフォメーションコーナー
- 家庭科室をサロン兼インフォメーションコーナーに。
  - 何年生がどこで何をやるのかなどがわかる情報は必要か？→広報をするので必要ない？
- 広報
- PTA 広報誌…12月22日までに配布。保護者向け。
  - 校長室だより…12月24日の午前中に公民館に。授業内容の一覧も。地域と保護者向け。
  - 前日に情報メール…保護者向け。

## 2012年 1月12日

- 糸島ちりについて
- 限定100食は目安なので、整理券などは配らずに無くなったら終了ということでもよい。
  - 配膳は家庭科室で行う。
- 説明会について
- 場所は図工室に変更。体育館では移動に時間がかかり、「糸島ちり」の時間が短くなってしまうため。
  - こじんまりした環境なので、説明会の流れもかっちりせずに柔軟なものにする。
- みんなの授業について
- 1年生は、5つのグループでローテーション。他の学年に参加している保護者を待つ子どもは、教室で待機。／• 2年生は変更なし。／• 3年生は、「光と影のファンタジー」、渡り廊下の飾り作り。／• 4年生は、保護者用のイスとして、図書館、家庭科室のものを借りる。それに併せて、家庭科室で使うイスは公民館のイスを借りる。足りなければ体育館のものを借りる（前日に移動作業）。／• 5年生は、紙飛行機41名、落語20名、手芸（ミサンガ）28名、絵手紙26名。／• 6年生は、雨の日の対応は要検討。
  - 写真を公表する場合は、校長の許可が必要。

多分野協働による大学と地域の新しい連携の模索と展開

○サロン

- 茶菓子は、岡先生に発注をお願いする。
- みんなの登校日についての話を促す役が必要。→児玉さんの他、PTAの手の空いている方にもいてもらう。

○アンケートについて

- 授業後に大人と子どもが一緒に振り返りをするという形式で。
- 子どもについては、学年によって形式を変えたほうがよい。
- 大人については、立場（保護者、地域の方、学生など）がわかるようにし、記名は強制しない。

○その他

- 駐車場案内で、3名ほど学生に手伝ってもらいたい。

資料2. プレ・みんなの登校日当日のチラシ

**プレ** 遊多江小学校  
**「みんなの登校日」**

「みんなの登校日」は、地域に住まうみんなが登校する日です。来年度からの本格開催に向けて、本日17日に「プレ・みんなの登校日」を開催いたします。

「みんなの登校日」では、地域の皆さんと協力しながら子どもたちが健やかに育つ場をつくり、そして学校を拠点に「地域のみんな」が元気になるきっかけづくりを目指しています。

「みんなの登校日」は、授業参加ではありません。保護者のみなさまは、自分のお子さんだけでなく、興味のある授業に参加し、遊多江小学校の子どもたちと一緒に授業を楽しんでください。

また、「みんなの登校日」は、教職員、保護者のみなさまをはじめとした「地域のみんな」が対等な立場で運営していくことを目指しています。

「こんな授業があるといいなあ」  
「こんな授業だったら、私が先生になれる！」  
「一緒に運営してみたい！」  
などなど。みなさんのご意見をお待ちしています。

裏面に案内マップがあります。  
興味のある授業にご参加ください。

みんなの案内マップ

※ 12:10～13:00 決まりのしおり、紙芝居等の配布(12:10～12:30)【特別授業(紙芝居、紙芝居)】  
※ 13:00～14:00 特別授業「みんなの登校日」(7名参加)【特別授業】  
※ 14:00～15:30 「みんなの授業」(1年生のみ15分まで)  
【1年生】自由遊び(15分)→1年生の授業(15分)→1年生の自由遊び(15分)  
【2年生】自由遊び(15分)→2年生の授業(15分)→2年生の自由遊び(15分)  
【3年生】自由遊び(15分)→3年生の授業(15分)→3年生の自由遊び(15分)  
【4年生】自由遊び(15分)→4年生の授業(15分)→4年生の自由遊び(15分)  
【5年生】自由遊び(15分)→5年生の授業(15分)→5年生の自由遊び(15分)  
【6年生】自由遊び(15分)→6年生の授業(15分)→6年生の自由遊び(15分)  
【7年生】自由遊び(15分)→7年生の授業(15分)→7年生の自由遊び(15分)  
【8年生】自由遊び(15分)→8年生の授業(15分)→8年生の自由遊び(15分)  
【9年生】自由遊び(15分)→9年生の授業(15分)→9年生の自由遊び(15分)  
【10年生】自由遊び(15分)→10年生の授業(15分)→10年生の自由遊び(15分)  
【11年生】自由遊び(15分)→11年生の授業(15分)→11年生の自由遊び(15分)  
【12年生】自由遊び(15分)→12年生の授業(15分)→12年生の自由遊び(15分)

資料3. プレ・みんなの登校日当日の様子

平成24年2月23日(木)

平成23年度九州大学教育学部との連携協力事業について  
糸島市教育委員会 教育部 学校教育課  
指導主事 伊藤 昭治

1 平成23年度の事業  
(1) 伊都塾（質問教室） (※資料1)



午前：小学生対象



午後：中学生対象 (平成24年2月)

【参加者】  
小学生：75名 (前期62名)  
中学生：48名 (前期36名)  
空室はじめてー 22名(前期15名)  
【九大生】

【児童生徒の感想】

- ・教えてくれる大学生の人が優しく話しかけてくれてうれしかったです。(小学生)
- ・大学生の人に自分が分からないところを細かく分かりやすく教えてもらって、自分の欠点が少しだけ減ったのでよかったです。(中学生)
- ・分からなかったところを優しく丁寧に分かりやすく教えてもらえて、とてもうれしかったです。4日間ありがとうございました。(中学生)

【学生やだー(九大生)の感想】

- ・持ち強一つ一つの問題を理解しようとしている小中学生の姿を見て、自分自身よい刺激を受けました。
- ・糸島市の子どもたちと触れ合う機会がもてよかったです。自分の知識や経験が、少しでも子どもたちの役に立てたのならうれしいです。
- ・糸島市は教育に大気力を入れているのだと感じました。また参加したいと思います。

(2) モデル校（波多江小学校）との連携協力事業  
ア 「みんなの登校日」改善プロジェクト



学生が学校の課題把握のためにPTAを調査



学生とともに考えたアイデアを提案



PTAや地域の方と企画会議





「プレ・みんなの登校日」の開催 (平成24年1月)



(※資料2)

- 1 -

資料4. 事後アンケート分析結果

今回集計したアンケート数

子ども：132（1年：25, 2-2：15, 4-1：31, 4-2：32, 6-1：29）  
大人：65（記名37）（1年：9, 3-2：8, 4-1：25, 4-2, 17, 5-1：2, その他：4）

子どもによる学びの記録から

- ・自分の学びに関わった人の固有な名前が描かれている。どのような困難があつて誰が支えてくれたのかも書かれているものが多い。…参加者の中で共有・交流しがいのある内容
- ・「UくんとKくんがトイレにいつているときこうちょう先生とはごいたをしたのがたのしかったです。…こうちょう先生としてたまはかえせなかったけどおもしろかったです」（絵にもこうちょう先生が描かれている）…参加者（学び手）としての教師の姿
- ・複数の子どもが挙げる「Sくんのお母さんのペンキぬり」、しかし当のSくんは自分の母親のことは書いていない。…わが子以外の子どもと関わったからこそ意味づけられた大人の活動

大人による子どもの様子の記録から

- 「子どもが楽しんでいた」「子どもの想像力のゆたかさにビックリ」…子どもの学び
- 「自分自身が作成に必死でした」…自らの学び／•「クラスの子供達と話ができて良かった」「隣の男の子が」「同じ班の友達に」…わが子以外の子どもとの交流の様子も読み取れた。しかし、子どもの固有名は書かれていない。／•「隣のNちゃんが優しく貸してくれてホント助かりました」…唯一、わが子以外の子どもの固有名が書かれたもの（しかも記名）。…交流しがいのある内容

Q1（新しい学びや発見はあったか？）の回答から

- 普段見れない子どもの姿が見れた／• おじいちゃんを今までになく尊敬をしていたようです。家族のかかわりのきっかけになりました。／• 意見を出し合うといろいろなアイデアがでてくるので、コミュニケーションの大切さをより実感しました／• よその方の親子の会話が聞けて興味深かった

Q2（良くなるためのアイデアや気づきはあったか？）の回答から

- お父さんお母さんばかり。「みんな」という意味がわからない。目的を明確に知りたい。
- 家と学校の過ごし方の違いがわかる。
- 全学年同じ時間にあるのでひとりひとり見ることができず子供にさびしい思いをさせてしまう。親子とするなら時間を変えてほしい。（1, 3, 4年生の保護者）
- 兄弟がおり、別の日だったら良かったです。それぞれに、ゆっくり一緒に作業したかったです（1, 4年生の保護者）・当初のコンセプトまでは届かなかった。・学年をまたがるなど、自分の子ども以外と関わらざるを得ない状況をデザインできると・どういう関わり方を参加者に求めているか具体的に書いてあると分かりやすく参加しやすい
- この日をみんながサークル的にたのしめるものであるとよいと思った

〈考察〉

子どもによる活動記録は、固有名を用いてどのような困難があって誰が支えてくれたのかにまで記述されているものが多く、子どもどうしにとどまらず、参加した者の中で共有・交流しがいのある内容だといえる。（中略）また、親子で活動することが前提となっている記述が多く見られた。自分の子ども以外の子どもへの関わりをどうデザインするかが今後の課題である「『みんな』という意味がわからない」「当初のコンセプトまでは届かなかった」といった従来の授業参観とは異なる「みんなの登校日」の理念に対する興味を読み取れる記述も見られた。今後コンセプトをさらに練って、発信していく必要がある。

（文責 大島崇・九州大学大学院人間環境学府博士後期課程大学院生／リサーチアシスタント）

## **Groping and Deployment for New Cooperation between Universities and Community by Multidisciplinary Collaboration**

**Satoru TANOUE Sachie OKA Masahiro TAKITA**

November 2010, Kyushu University Faculty of Education, signed a Memorandum of Cooperation with Board of Education in Itoshima City. By this to the opportunity, we've been exploring new cooperation between universities and community to contribute to both the university (Education and Research) and the school and community (Improvement and Activation of Educative Function).

The purpose of this paper is to discuss the significance and potential of groping and deployment of this cooperation.

Members of the University who worked on this cooperation are the following three people, TANOUE (who is an expert in School Education), OKA (an expert in Social Education) and TAKITA (an expert in in Community Development).

In this paper, first, TANOUE has been explained the history of the cooperation and discussed the conditions for multi-disciplinary collaboration by examining the initial efforts. Then, TAKITA has been discussed ways of multidisciplinary collaboration that focuses on specific initiatives. Finally, OKA has been discussed the recognition frame of the parties who work in the multi-disciplinary collaboration from the point of view of the field development.

The summary of discussion is as follows: First, this actual effort itself supported the multidisciplinary collaboration as “coexistence of place”.

Then, the presence and format of a variety of parties concerned functioned as a trigger for bundling each of expertise. Finally, through this initiative, we have discovered the significance and potential in the “analysis-oriented and problem-solving that intention to continue fellowship” and “sustaining the ambiguous relationship and trial and error with the subject.”